

【第二回】

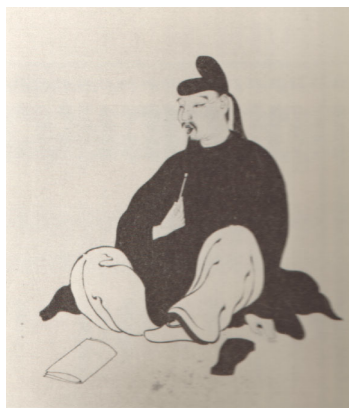
和様について — 三跡を中心に —

さんせき

一、三跡（三蹟）

・小野道風（おののみちかぜ・とうふう）（八九四―九六六年）

やせき
野跡



- ・「王羲之の再生」と賛美された
- ・和様の開祖
- ・純日本的書の祖

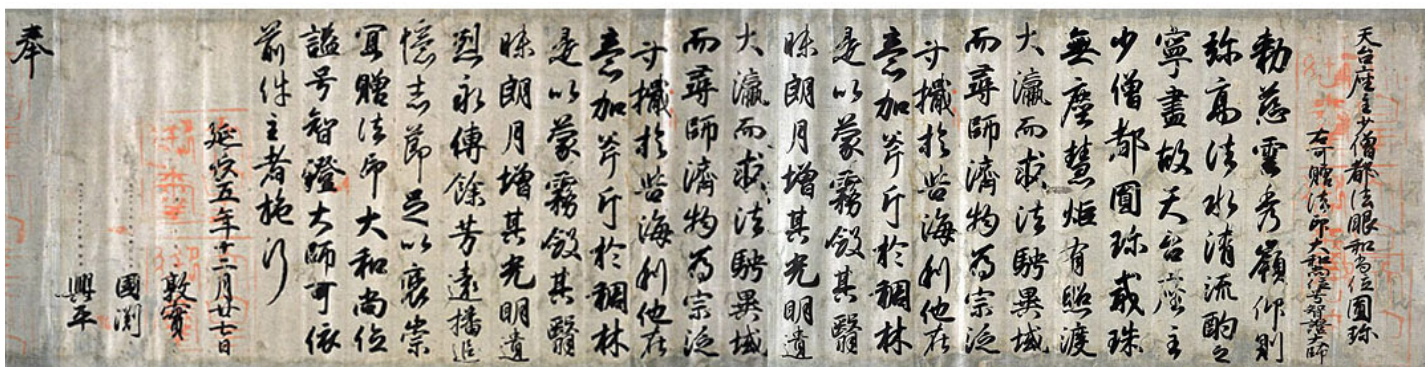
- ・「如泥人」と言われた。「泥のごとき人」とは怠惰な人という意味。
- ・道風様を継承したが、後年唐様に戻り、道風様から離れた。
- ・和様の中の異端者。



- ・冷静沈着、温厚で大変まじめで面白くない人物。
- ・夢で道風に会い道風に書法を伝授されたと言っている。道風様を守り、和様の大成者となった。
- ・朝廷の書き役として室町時代中頃まで続く世尊寺流の祖。
- ・代々「能書の家」となっていた。
- ・温和で優雅であかぬけた書風は天下太平な藤原道長の時代の貴族の理想美であった。
- ・清少納言はよき理解者であり、友人であったようだ。

小野道風

えんちんせうほういんだいしやういならびにちしやだいししこうちよくよ
円珍贈法印大和尚位並智証大師諡号勅書（九二七年）



天台座主少僧都法眼和尚位
円珍

右、法印大和尚位と号智
証大師とを贈るべし。

勅す。慈雲の秀嶺、仰げば
すなわち弥高く、法水の清
流、之を酌めども寧ぞ尽き
んや。故天台座主少僧都円
珍。戒珠に塵無く、慧炬照
らす有り。大瀛を渡りて法
を求め、異域に聘せて師を
尋ぬ。物を済うを宗と為
し、舟楫を苦海に泛ぶ。
利他意在り、斧斤を欄林
に加う。是を以て蒙霧其の
翳昧を斂め、朗月其の光明
を増す。遺烈永に伝え、
余芳遠く播る。志節を追憶
するに、以て褒崇するに足
らん。宜しく法印大和尚位
と諡号智証大師とを贈るべ
し。前件に依り主者施工す
べし。

延長五年十二月二十七日。
三品行中務卿敦実見
□。従四位上行中務大輔
源朝臣興平。

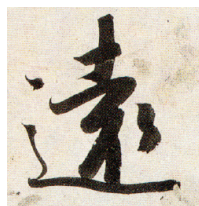
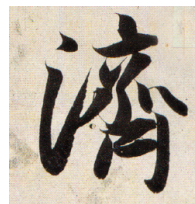
（勅を）奉り、（右の如く牒
到らば奉行せよ。）

《和様の伝統的な書き方》

運筆は太くなめらかで、温和な円満な書。肥瘦にかたよらない中庸の筆法で、筆を堅に堅くとつて筆先で円くなめらかにゆるゆると書く。（単鉤法・藏法・直筆）中国と違って、日本の自然は「和」である。その自然に合わせて王羲之の書に肉をつけて道風は書いた。その日本のナ書き方は道風以来続いている。その源流は王羲之である。

《王羲之との比較》

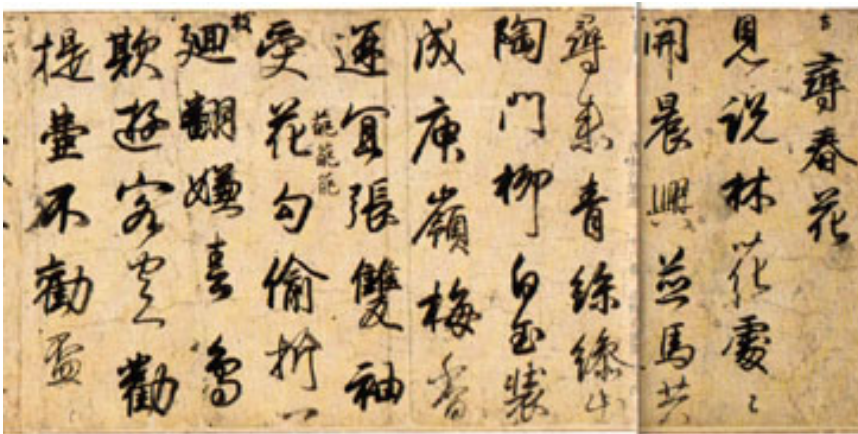
集字聖教序（六七二年）



サンズイーはね上げ部が長い

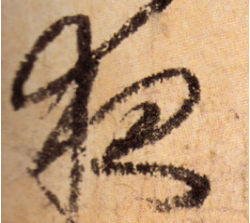
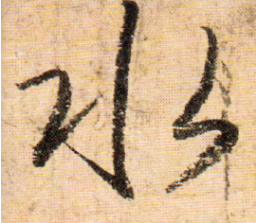


屏風土代（九二八年）部分（漢詩を書いたもの、屏風のための下書き）



春花を尋ぬ。
見説、林花処々に
開くを。晨に興き、
馬を並べ共に尋ね来
る。蒼糸縹り出す、
陶門の柳。白玉装
成す。庚嶺の梅。香
進つて、宜しく双
袖を張つて受くべ
し。葩（花）句（勾）
つて、儵に一枝折
つて廻る。翻つて嫌
う、春鳥遊客を欺く
を。空しく提壺を勧
めて盃を勧めず。

道風



晋祠銘



異なる点

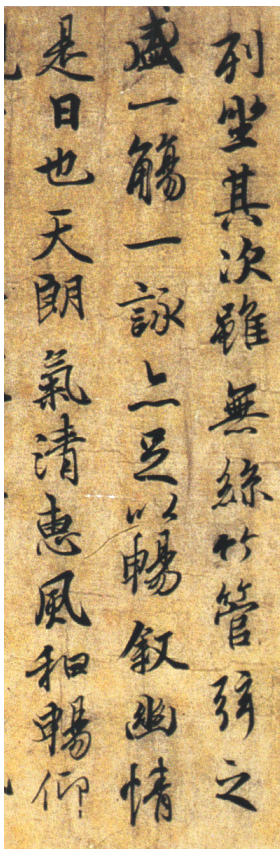
道風



晋祠銘

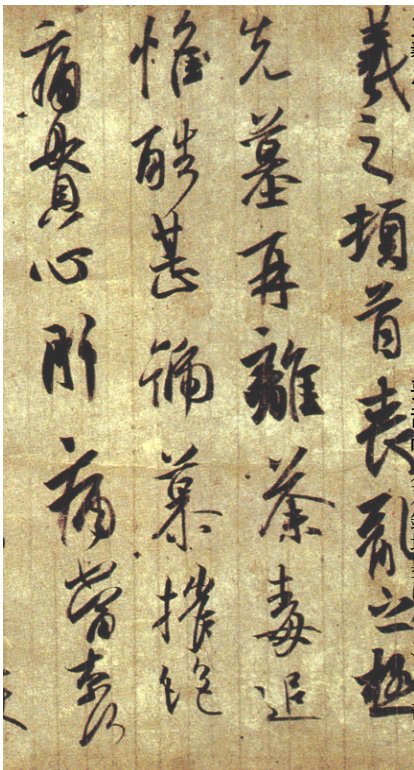


王羲之



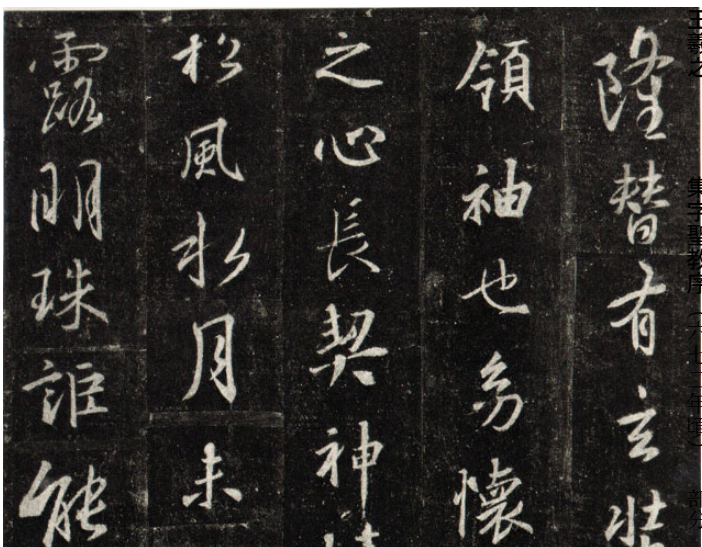
蘭亭序（三五三年）神龍半印本 部分

王羲之



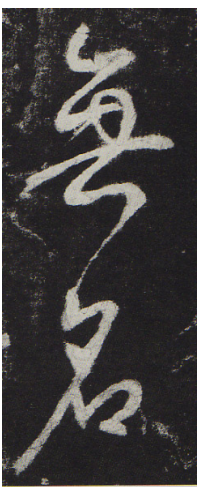
喪亂帖（双鉤填墨による）部分

王羲之



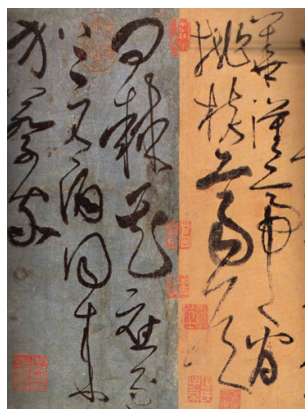
蘭亭序（八十七三年）部分

連綿

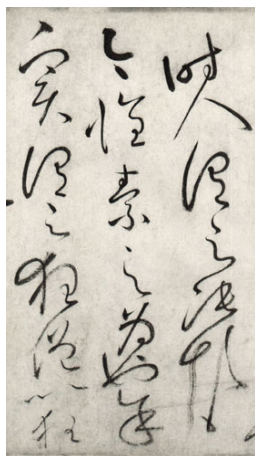


最終画を長くする

狂草

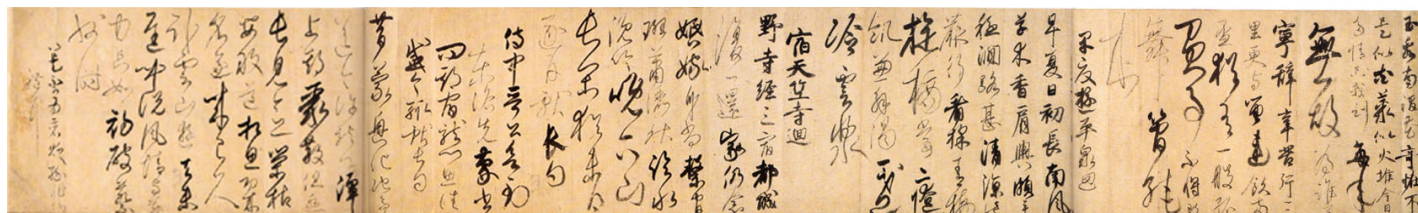


張旭
ちようしゆく

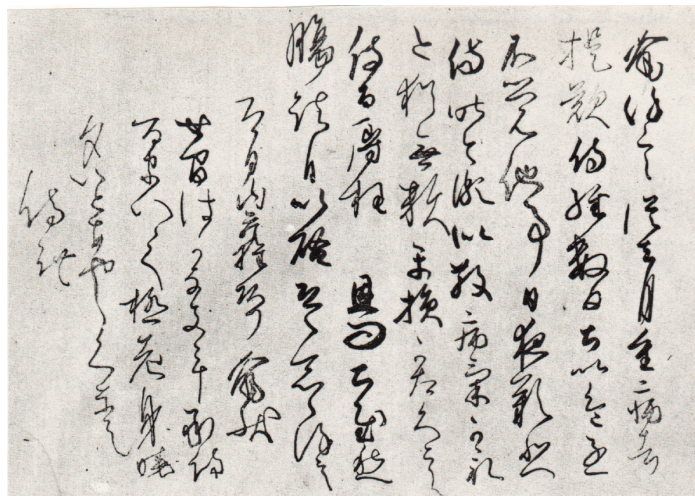


懷素
かいそ
「自叙帖」(七十七年)

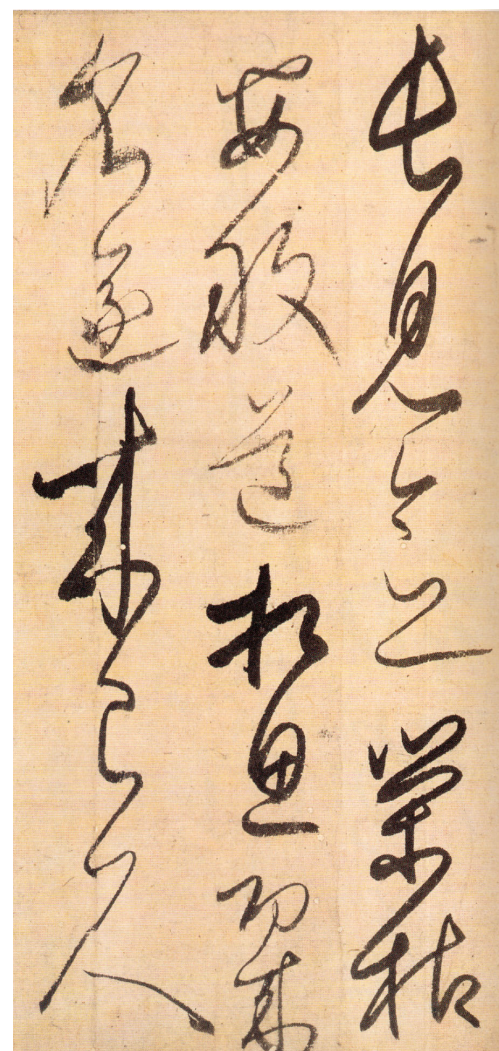
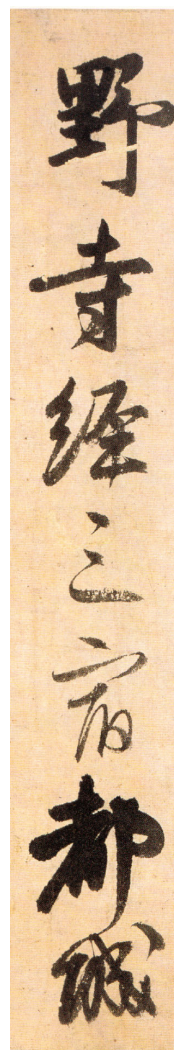
《尺牘から詩卷へ》
漢代から尺牘(手紙)を芸術として鑑賞することが始まったが、盛唐の頃の張旭、懷素らによって横巻に詩を書いて作品を作り始めた。これ以後文芸が書によって鑑賞されるようになった。

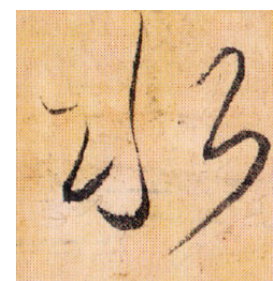
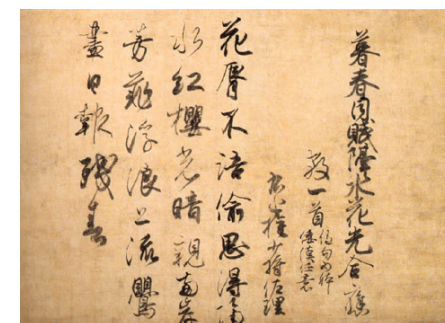
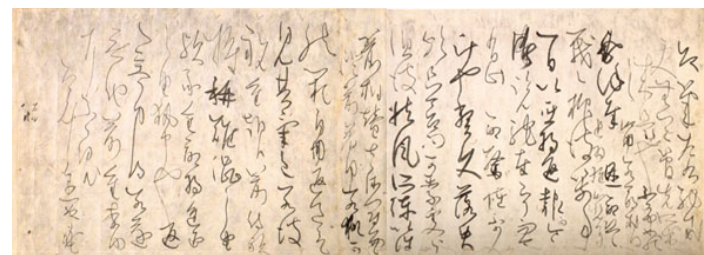
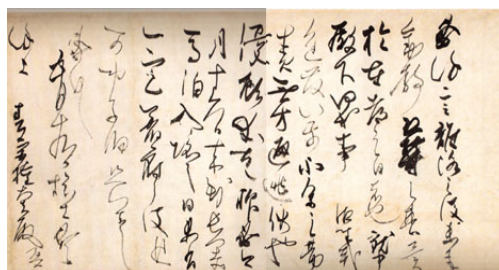


玉泉帖 (白氏文集を書写)
ぎよくせんじよう はくしもんじゆう



書状 (浪華帖)
しよじよう





八月十五夜因詠寄歌月
月如金傳唯此夜
皆色是光為山
裏千重雲海
南彩江清東
重情白頭相
之月明年
送
威星
古
得
青
晚
郎
上
揚
此
天
國
逢
初
仙

何所須此月乎
采芝月更今宵能

閑居屬於誰人
之序主也秋水好於何
處未嘗院之秋家也
此智者不樂之故
我君之歡脫履此

一

一

一

一

一

水

水

水

水

新

行

柳

歸

新

柳

行

歸

閑居屬於誰人
之序主也秋水好於何

歷秋夜月
出山清光夏日

二、^{きのつらゆき}紀貫之（八六八？—九四五？）能書と伝えられるが真跡はない

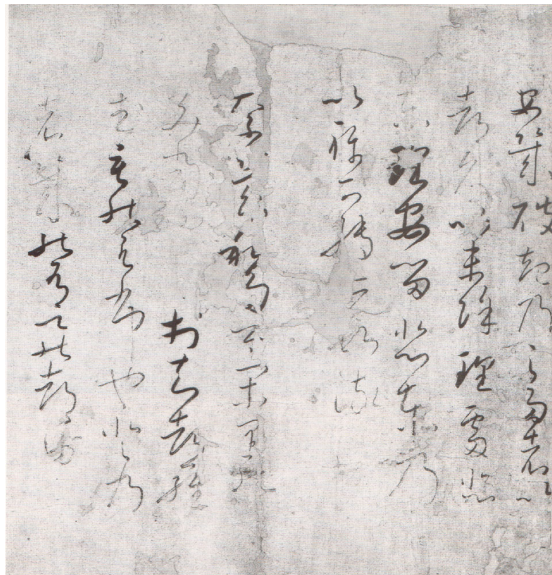
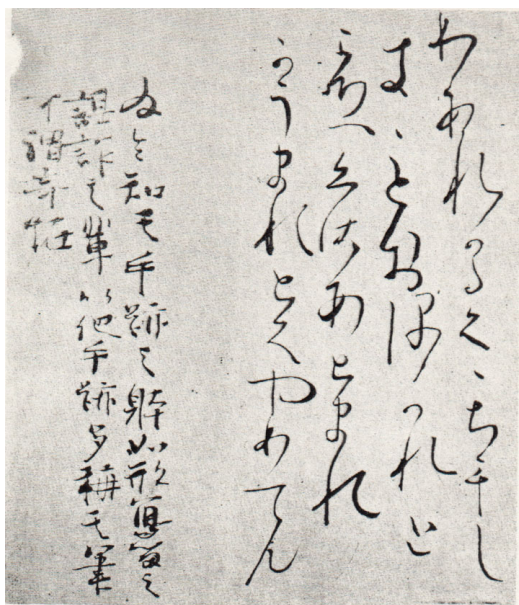
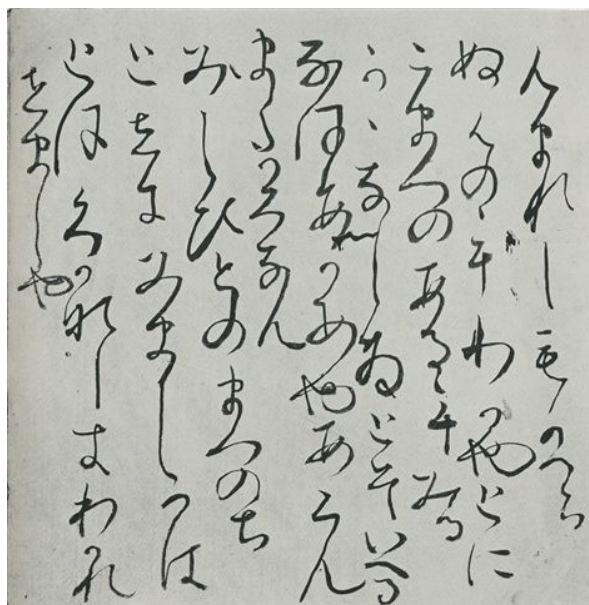
『古今和歌集』（九〇五—九一五年頃）

仮名序

部立て（全巻の構成）

外来文化と日本文化

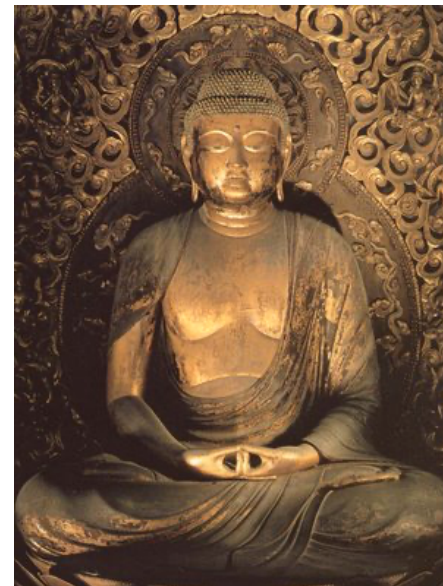
『土佐日記』 仮名で書かれている。国文学への道を切り開いた、大変重要な日記文学である。この影響の下、源氏物語や日記文学が生まれた。また、こつけない本や隠遁文学のはしりでもある。



三、和様の文化（国風文化・藤原文化・藤原時代・藤原美術）

藤原時代は日本人として品位を求める心が生活・文化・美術に品位を重んじ、品位という美的理想を實現した。これは唯美主義を基調とした表面装飾の文化である。

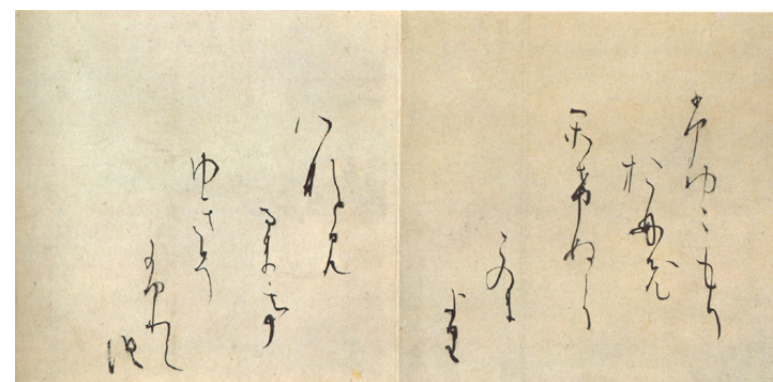
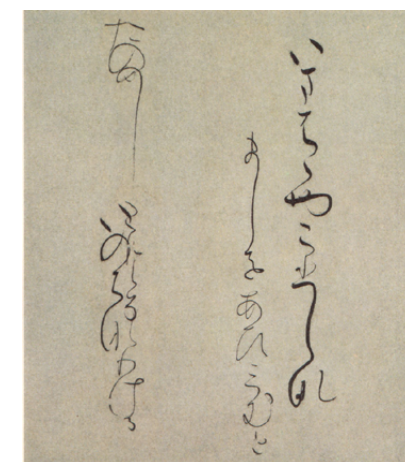
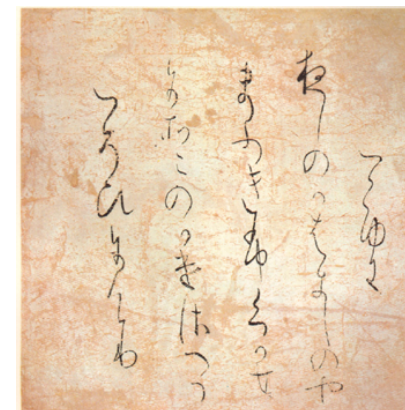
和様建築



やまと絵



∪



《参考文献》

- | | |
|------------------|-----------|
| 日本名筆選⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒ | 二玄社 |
| 中国法書選⑮⑯⑰⑱㉒㉓ | 二玄社 |
| 図説日本書道史 | 芸術新聞社 |
| 図説中国書道史 | 芸術新聞社 |
| 草書百科 | 芸術新聞社 |
| 仮名百科 | 芸術新聞社 |
| 紀貫之 目崎徳衛著 | 吉川弘文館 |
| 土佐日記 | 角川文庫 |
| 古今和歌集 | 各種出版されている |
| 書聖小野道風 春日井市道風記念館 | |
| 書道全集⑫⑬⑭⑮ | 平凡社 |
| 日本の書③ | 講談社 |